

モロッコ都市のフィールド・ノートから

大島 圭子

家庭内に水道を有していない人々がどのように水を得ているのかを調査するために、私はサレの新市街に隣接するバラック街へと向かった。それまで何度となくバスの中から盗み見したことはあったが、そこに降りるのは初めてだった。

思ったより、到着するのに時間がかかってしまい、すでに夕方になっていた。

初めて目の前にするバラック街、ドゥアル・ジャディド(Douar Jdid)は想像していたよりも大きく、バス通りに面して広がっている。通りの反対側にはサレ屈指の新興高級住宅街、ハイ・エッサラムの近代的なアパート群が立ち並ぶ。通りひとつを挟んで、対称的な光景が広がっている。このあたりは治安が悪いので有名で、外国人はおろかモロッコ人も、日中でさえあまり近寄りたがらない。

バス通りに沿って行政によって壁が作られ、中が通りから見えないようになっているが、住民の出入口になっているところどころの壁の切れ目から、中の様子が垣間見える。

壁の外側には若者がたむろしており、路上には生ゴミやプラスチックの袋などが散乱している。ぼつんと1台、歩道の上に設置されたダンプスターに、子供達がよく登ってゴミを漁っている。

1人の煙草売りがうなだれ、壁にもたれて座りこんでいた。目の前を通り過ぎようとする、面倒くさそうに頭をあげ、ぼんやりと私を見た。しかし、客じゃないことを悟ると興味がなさそうにまたうなだれてしまった。

緊張しながら壁の切れ目から「壁の中」に入ると、すぐ目の前に共用栓が設置してあった。そこはちょっとした広場になっており、井戸端会議をしている女性達やサッカーをして遊んでいる子供達でいっぱいである。バス通り沿いに街灯が設置してあるものの、「壁の中」には電気が通っていないから、あたりは薄暗く細部はよく見えない。

すぐに何人もの人が私に気づき、何かと集まってきた。共用栓で水を汲んでいる女性達に挨拶すると、彼女達の表情が和らいだのが見え、すぐ

に挨拶が返ってきた。共用栓には蛇口が3つついており、蛇口をひねると水が勢いよくほとばしる。この水は1世帯につき月額5ディルハム(約60円)を支払えば使い放題であり、1家族あたり1日に40リットル程度の水を使用するとのことである。女性達は取っ手のついたオレンジ色あるいは黄色のプラスチック製の容器(bidou)に水を汲んでいる。この容器は5リットル入り食用油の空き容器であり、再利用しているのを街のあちこちで見かける。

気がつくと広場はこの「侵入者」を見ようと集まった人達でいっぱいになっていた。ちょうど共用栓を挟んで40人程の人々と対面する形となり、私は内心冷や汗をかいていた。

誰も一言も発さず、ただ私達は見つめあっていた。

「アッサラムアライクム」

思いきって声をかけてみた。「アライクムッサラム」と人垣が答える。自分がここに来た目的を述べてみた。人垣が湧き立った。代表者らしい男が手を振って「わかった、手伝ってあげよう」と言うと、「壁の中」を案内してくれた。

広場を抜けて、居住地区に入る。トタン屋根の小屋が密集して建てられており、屋根の上にはトタンが飛ばないように、大きめの石がいくつか載せてある。バッテリーで発電しているらしく、何軒かの屋根にはテレビのアンテナも立っている。さすがにパラボラアンテナは見られない。家と家の間の通路は幅が50センチメートル程で、地面は土で踏み固められており、ところどころ溝ができて水が溜まっている。家々から漏れている明かりはガスランプである。こじんまりとした居住区の真中には車1台がやっと通れるほどの通りがあり、両側に肉屋や八百屋、雑貨屋などの商店や、住宅が隙間なく立ち並ぶ。地面に立てられた棒と棒の間に針金が渡され、ほろほろの洗濯物が力なく風にそよいでいる。

その光景は、まるで小さなメデイナといった趣

であり、奇妙な秩序に支配されていた。

私達のあとを子供達が追う。その数はどんどん増えてまるで遠足か何かのような雰囲気である。子供達はふざけあったり笑ったりしながら、私に覚えてたであろう正則アラビア語やフランス語で話しかけてくる。

男は地区の中に設置された共用栓を案内してくれた。次に案内された共用栓は蛇口が2つついており、女性がちょうど水を汲んでいるところだった。女性が水を差し出してくれたので飲んでみると、ぬるいがホテルの水道水と同じ味がした。この共用栓の使用料は1世帯につき月額3ディルハムであるとのことだ。私の姿を見つけてさらに子供達が集まってきた。

撮影許可を求めると、問題ないというので写真を撮らせてもらうことにした。子供達がおおはしゃぎで我先にポーズを作る。その笑顔にまったく他意は感じられない。

少し進むと、トタン屋根の露店のようなものが集まっている開けた土地にでた。ここは市場で、住民達が買い物に来るのだが、ゴミがあたり一面に散らばっていて、ゴミ捨て場のようにも見える。ゴミを漁る人々の姿も多い。

やがて1周したらしく、元の共用栓に戻ってきた。人々の姿は減り、代わりに夕飯の支度をすいいい匂いがあたりに立ち込めていた。もうそろそ

ろ帰る時間だ。

丁重に男に礼を述べ、その場に残っていた女性達にもお礼を言ってバス通りへと向かう。男は「Bon courage」(がんばってね)と私に言った。もう1度礼を言うと私は地区を後にした。子供達は私が見えなくなるまで何度も何度も手を振っていた。

バス通りを歩いていると、1台の車が通りかかり私の横で止まった。中年の夫婦らしき男女であり、立派な身なりをしていた。運転していた男は「こんなところで何をしているの」とフランス語で私に話しかけた。「友達に会いに…今からバスで家に帰るところです」と答えると、「ここは危ないから早くバスに乗りなさい」と言い、私のバスが来るまで車を止めて待っていてくれた。手を振って私がバスに乗り込むのを見届けると、車は短くクラクションを鳴らして走り去った。

バスの座席で揺られながら、私は先ほど聞いた言葉の意味を複雑な思いでぼんやりと考えた。親切な紳士の車の助手席に乗っていた女性が、私に向かってにっこりと微笑みかけた後で、「壁の中」を横目で一瞥し、「こんなモロッコの恥だわ」とモロッコ方言で吐き捨てるように言ったのを私は聞き逃さなかった。

「壁の中」の住人は誰1人として私に物をねだらなかつたし、その表情はとても明るかつた。不



サレ市郊外、ドゥアル・ジャディドの共用栓を利用する子供達
(2000年2月 モロッコ)

法占拠地区という単語から想像していたような悪いことは、何ひとつ私の身に起こらなかったし、それどころか何の前触れもなく突然訪れた私を快く受け入れてくれた彼らを、悪いイメージを持って見ていた自分を恥ずかしく思いさえした。

彼らは彼らの生活を営んでいる。その場所がたまたま不法占拠地区ただけである。彼らは確かに貧しいかもしれないが、それは彼らの心が貧しいということにはならない。

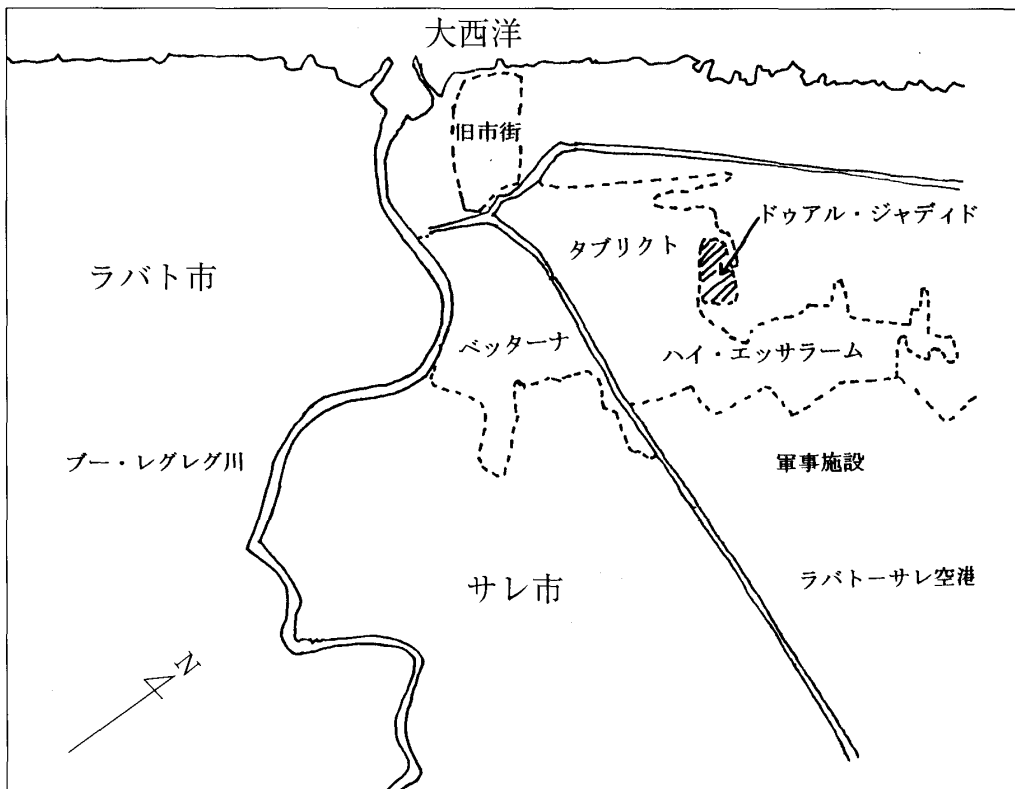
いい人間もいれば、悪い人間もいるだろう。私は

今回偶然いい人に出会ったのかもしれない。

不法占拠地区の人々の移転計画が行政によって進められており、地区周辺に彼らのためのアパートが建設されている。これによって不法占拠地区の住民数は年々減少している。

それは彼らのためだろうか？それとも「恥」を排除するためだろうか。

彼らがそれを望むのなら、きっと理由はどちらでもいいのだろう。



モロッコ、サレ市周辺の概略図